

# ドイツの英語教科書に見られるコミュニケーション・ アプローチの実践（その4）

長谷川 恵 洋

本稿は「ドイツの英語教科書に見られるコミュニケーション・アプローチの実践（その1）」（『阪南論集人文・自然科学編』第28巻第4号，1993年），「同（その2）」（『阪南論集人文・自然科学編』第29巻第3号，1994年），「同（その3）」（『阪南論集人文・自然科学編』第31巻第3号，1995年）に続く最終稿である。全体の目次を再度しめす。

## 目 次

はしがき

- 第一部 1 CONTACTS 5 の内容の概要  
2 CONTACTS 6～10 からの抜粋  
3 文法的説明その他について

- 第二部 1 コミュニカティブ・アプローチとは  
2 日本の英語教育 vs ドイツの英語教育  
3 エリート選抜のための英語教育 vs 民主主義のための英語教育

まとめ

本稿に記載するのは「第一部の3」で，前号（その3）からの続きである。昨年，前号(その3)を書いたところで中断して，阪南大学叢書『英会話と英語教育』の執筆に入った。その際，本稿で予定していた「第二部」の内容を，同書に取り入れて，3章3節に「コミュニケーション・アプローチについて (Communicative Approach と民主主義)」(93—95ページ)および「コミュニケーション・アプローチについて (日本の英語教科書とドイツの英語教科書)」(96—98ページ)として記載した。したがって本稿では第二部を省略する。

## 第 一 部

### 3 文法的説明その他について（前号の続き）

#### \* 能動文と受動文についての説明と練習

##### Aktiv

1. A **painter paints** the doors.
2. An **electrician fixes** the electricity.

In diesen Sätzen ist das Subjekt (painter, electrician) „tätig, aktiv“.

（上記の文では，主語が「活動的，能動的」である。）

Deshalb nennt man sie **Aktivsätze**.

（故に，これらを **能動文** と称する。）

Die folgenden Sätze haben den gleichen Inhalt wie 1. und 2.

(下記の文は 1, 2 の文と同一内容である。)

Doch sie drücken ihn anders aus:

(だが, 表現法は異なる。)

Hier ist das Subjekt nicht „tätig“,

(この文において主語は「活動的」ではなく、)

sondern mit dem Subjekt „wird etwas getan“.

(その主語について「何かがなされる」のである。)

### Passiv

3. The **doors are painted** by a painter.

4. The **electricity is fixed** by an electrician.

Sätze, in denen mit dem Subjekt etwas getan wird,

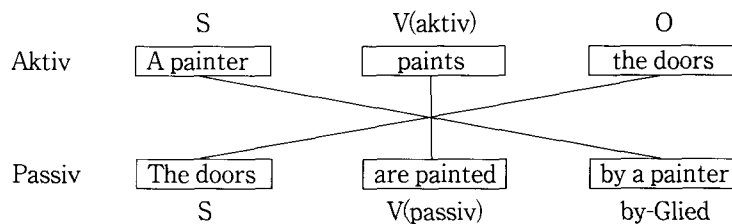
(主語について何かがなされる文)

in denen das Subjekt also „passiv“ ist,

(また, その主語が「受動的」である文を)

nennt man **Passivsätze**.

(**受動文** と称する。)



### Practice

1. The outside walls are built by a bricklayer.
2. A plumber fixes the plumbing.
3. The wiring system is fixed by an electrician.
4. The plumbing is fixed by a plumber.
5. A carpenter makes the wooden parts.
6. A bricklayer builds the outside walls.
7. The wooden parts are made by a carpenter.
8. An electrician fixes the wiring system.

Welche Sätze haben den gleichen Inhalt? (どの文が同一内容か。)

Welche Sätze sind Aktivsätze? (どの文が能動文か。)

Welche Sätze sind Passivsätze? (どの文が受動文か。)

**Practice:** Verwandle diese Aktivsätze in Passivsätze.

(次の能動文を受動文に変えなさい。)

1. Fern washes the clothes.
2. Neil does the shopping.

3. Neil takes out the garbage.

⋮

(CONTACTS 7, pp.65-66)

まず能動文(1,2)と対応する受動文(3,4)を示し、次に能動文と受動文の統語構造上の関係を示し、そして練習問題を課している。日本の英語教科書や参考書においてもよく見かける導入の仕方である。

ただし、ドイツ人が能動態と受動態を学習するのは、我々の場合とは状況が異なる。ドイツ語と英語は、能動・受動の表現がそれぞれ構造的に対応している。英語に見られる能動態と受動態の統語上の相互関係は、それとほぼ同一のものがドイツ語にも存している。我々の場合は初めて遭遇する統語構造を新たに訓練せねばならないのであるが、ドイツ人の場合はすでに母語にある統語構造を再認識するだけのことである。ドイツ人にとって「能動態 ↔ 受動態」の変換は、我々のように訓練しなくても最初からオートマチックになし得るであろう。

さらに、ドイツ語においては、「動作受動(werden+過去分詞)」と「状態受動(sein+過去分詞)」の区別があるが(例: Die Tür wird von ihm geschlossen. [動作受動] / Die Tür ist jetzt geschlossen. [状態受動])<sup>1)</sup>、ここでは、そのことについては触れていない。ちなみに上記の例文はすべて動作受動である。

#### \*CAN, MAY, MUST について

##### Now that I'm thirteen:

I can stay out until 8.30.

I may stay overnight with my friends.

I must clean my room alone.

##### When I was ten:

I could stay out until 7.30.

I wasn't allowed to stay overnight with my friends.

My mother had to help me.

SIMPLE PRESENT  
(Gegenwart)

SIMPLE PAST  
(Vergangenheit)

I can        ich kann

I could        ich konnte

I may        ich darf

I was allowed to        ich durfte

I must        ich muß

I had to        ich mußte

(CONTACTS 7, p.67)

SIMPLE PRESENT と SIMPLE PAST を対応させている。ドイツ語の場合それぞれの話法助動詞の現在形と過去形が対応しているが、英語の場合、may に対しては might ではなく allow を用いた表現になっている。must の場合は、そもそも must の過去形というものが存しないから had to で表現せざるをえない。can についても、上記では一応 could を用いているが、仮定法過去との混同をさけるために could よりも was(were) able to を用いることが多い。

英語とドイツ語の話法の助動詞を比較すると、ドイツ語の方が完全な体系を有している。ドイツ語の話法助動詞には、不定詞（例えば *Man ißt, um arbeiten zu können*）も過去形も過去分詞も直接法も接続法もある。（cf. 佐々木庸一『新 英語から入るドイツ語』郁文堂, 131ページ）それに比べると、英語の話法助動詞は文法的にその体系が不整合であり、それを補うために様々な他の表現を使わなければならない。

英語の仮定法は、それを表すための動詞の語形変化が独自に存在しているのではなく、過去形によって代用している。逆に言えば、*could* や *might* は過去の意味と仮定法の意味の両方を有するのである。*can* や *may* の（仮定法ではなく）過去の意味だということを限定的に明確に表すためには *could* や *might* 以外のものを借りてこななければならないわけである。

ドイツ語の話法助動詞の体系は英語に比べて、より複雑ではあるが、より整合性をもったものである。このことは、話法助動詞だけでなく、ドイツ語と英語の文法体系一般について言えることである。ドイツ人にとって英語の文法構造を学習するということは、母語によく似ているが所々、不完全であるものを母語の文法体系と比較しながら認識し学習すること可言えよう。

ドイツ人は、英文法について特に説明しなくても、英語のネイティブスピーカー以上に英語の文法構造がよく見えているのである。我々日本人にとって英語の文法構造は、日本語の構造とは全く異質なものである。何らかの説明をしてもらわないと全く未知のものなのである。

\*SOME と ANY について

Have you got any stamps?  
Yes, I've got some. How many do you need?  
I don't have any British money left.  
Ask your father. He's got some.

**any** steht meist in Fragen und verneinten Sätzen;  
(any はたいてい疑問文と否定文に用いられる。)

**some** steht meist in bejahten Sätzen.  
(some はたいてい肯定文に用いられる。)

In derselben Weise werden auch Zusammensetzungen mit **some** und **any** gebraucht:  
(some や any から成る合成語も同様に用いられる。)

somebody	anybody	(irgend)jemand
someone	anyone	
something	anything	(irgend)etwas
somewhere	anywhere	irgendwo

(CONTACTS 7, p.116)

Would you like some potato salad?

Could we borrow some matches?

Do you want some cookies?      Could you give me some help?

some wird auch benutzt, wenn man etwas **anbietet**  
oder um etwas **bittet**.

(また some は何かを提供したり何かを求める場合に用いられる。)

(CONTACTS 7, p.117)

some と any については, CONTACTS 5, p.24 (『阪南論集人文・自然科学編』第31巻第3号, 1ページ) および CONTACTS 5, p.124 (同上, 3ページ) に引き続き, 三度目の言及である。一度目は発話の丁寧さのレベルという観点から, 二度目はコミュニケーションの場という観点から, some と any の用法について考えた。

今回は統語的な見方であり, 日本の英文法書や参考書でもよく目にする説明の仕方である。ただし, some は肯定文で用いられ any は疑問文と否定文で用いられるというこの説明は, some と any の全ての用例にはあてはまらない。上記の説明では, 疑問文であっても何かを提供したり求めたりする時は some を用いるという補足的な説明を加えている。

some と any の区別を統語構造の中で体系的に説明しようとしても簡単に割り切れるものではない。むしろ各用例ごとに個別に考えていった方が良いのかもしれない。いずれにせよ, some と any に関する説明がくどいほど何度も繰り返されるのは, 先述のように, ドイツ語に some と any の区別に対応する語彙構造が存しないからであろう。(cf.同上, 3-4ページ)

#### \* Direct speech と Reported speech<sup>2)</sup>

Direct speech:

Georgia: "I am in the ninth grade."

Reported speech:

Georgia says to CONTACTS that **she is** in the ninth grade.

Direct speech:

Georgia: "I do my homework in my study period."

Reported speech:

Georgia tells CONTACTS that **she does her** homework in her study period.

Direct speech:

Georgia: "At noon **we** have lunch with **our** classmates."

Reported speech:

Georgia remarks that at noon **they** have lunch with **their** classmates.

Wie du sicher schon gemerkt hast,

(きっと既に気づいたことであろうが)

gibt die **direct speech** (wörtliche Rede) Aussagen so wieder,

(直接話法は陳述を再現する。)

wie sie **vom Sprecher gestaltet** wurden.

(話し手によって形成されたように。)

In der **reported speech** (nichtwörtliche Rede)

(間接話法においては)

wird dagegen meist über **Aussagen anderer** berichtet.

(逆に、また別の人(第三者)によって陳述内容が語られる。)

**Aufgabe:** Stelle fest, was sich in den Aussagesätzen geändert hat,

(課題: 陳述文において何が変わったかを確認しなさい。)

als sie von der **direct speech** in die **reported speech** umgewandelt wurden.

(直接話法から間接話法に変えられたときに。)

Die wörtliche Rede wird — wie im Deutschen — in Anführungsstriche gesetzt.

(直接話法は、ドイツ語と同じく、引用符の中におかれる。)

Die Anführungsstriche vorn stehen im Englischen jedoch immer oben.

(しかし前方の引用符は英語では常に上につけられる。)

(CONTACTS 8, p.35)

直接話法と間接話法を対応させた例文を掲げ、次に直接話法と間接話法がそれぞれどのようなものであるかについて簡単に述べ、そして直接話法を間接話法に書き換えたときに何がどのように変わるかを確認させている。

英語では、話し手の言葉をそのまま述べたものを直接話法とし、それを第三者の視点からの語り口にしたものを間接話法とする。いわば、直接話法は一人称の語りであり、間接話法は三人称の語りであり、その二つの視点の違いによって英語の間接話法は直接話法と対照され区別される。

ドイツ語は英語とは間接話法の位置づけが異なる。ドイツ語では間接話法は接続法(Konjunktiv)の一環として位置づけられる。英語の間接話法はドイツ語では接続法で表現されるのである<sup>3)</sup>。

接続法とは、あくまでも話し手の心的態度を表すための「法(Mood)」の一つである。接続法には接続法第1式と接続法第2式がある。前者は不定詞の語幹を用い、後者は過去形の語幹からつくられる。内容的には、前者は事実(または確実)であることを保証しないが実現可能なことを表し、後者は非現実的なこと事実に反することを表す<sup>4)</sup>。

ドイツ語では、直接話法を間接話法にする際に、接続法第1式と接続法第2式のいずれを用いてもよい。いわば、ドイツ語の間接話法には英語では弁別することのない二つのニュアンスがあるわけである。

以上、ドイツ語の間接話法が、法(Mood)と絡んで英語より複雑な様相を示していることについて述べたが、時制にかんして言えば逆に英語のほうが複雑である。この点については CONTACTS 9, p.165 の引用について解説するときに触れる。

なお、上記の最後の行でわざわざ引用符の付け方についての説明をしているのは、ドイツ語では、引用符は „……“ のように付けるからである。ドイツ人が英語を学ぶ際には、このような細かいことが問題になる。我々とは問題点のレベルが異なると言えよう。

#### Reported Speech: Practice

Susan and her German friend Ute are visiting Susan's grandmother.

Granny is a bit deaf, and she can't understand Ute.  
Susan has to repeat everything. What does she say?

Ute: I've never been to Iowa before.

Granny: What?

Susan: She says...

Ute: I think River City is a beautiful place.

Granny: No, Granny. She says...

⋮

(CONTACTS 8, pp.35-36)

Susan が Ute の言ったことを耳の遠いおばあちゃんに言いなおすという実際的な場面を設定することによって、直接話法を間接話法に変換する練習を行っている。文法事項を習得させる場合にもできるだけコミュニケーション・アプローチをするための工夫がなされている。

#### Reported questions

reporting clause	reported clause
The tourist asks, The tourist asks me	"When will the bus arrive?" when the bus will arrive.
Janie asks, Janie asks me	"Do you want to see my new bike?" if (whether) I want to see her new bike.

As you have probably noticed, the word order in a reported question is the same as the word order in a simple statement.

**Note:** Reported yes/no questions begin with **if** or **whether**.

(CONTACTS 9, p.164)

ここでは間接疑問文の作り方を説明している。疑問詞があればそれを残し、なければ if か whether を間接文の先頭におく。その点はドイツ語と英語はまったく同じである（ドイツ語の場合、接続詞は ob）。間接疑問文の語順は英語とドイツ語とは異なる。英語の場合、平叙文と同じ語順であるが、それはドイツ人にとって注目すべきことであるらしく、上記ではそのことをわざわざ説明している。ドイツ語では枠構造を作るために動詞要素を文尾に移行するので平叙文とは異なった語順になる。

reporting clause	reported clause
Janie asked,	"Do you write many letters?"
Janie asked me	if (whether) I wrote many letters.

If the reporting clause is in one of the past tenses, the verb in reported

speech changes its tense:

reporting clause	direct speech	reported speech
<b>past</b> Janie asked (.)	simple present “Do you write...?”	simple past ...if I wrote...
<b>past perfect</b> Janie had asked (.)	present perfect “Have you written...?”	past perfect ...if I had written...
<b>future in the past</b> Janie would ask (.)	simple past “Did you write...?”	past perfect ...if I had written...
<b>future perfect in the past</b> Janie would have asked (.)	past perfect “Have you written...?”	past perfect ...if I had written...
	simple future “Will you write...?”	future in the past ...if I would write...
	future perfect “Will you have written...?”	future perfect in the past ...if I would have written...

(CONTACTS 9, p.165)

先に述べたように、間接話法の時制のシステムはドイツ語のほうが簡単である。ドイツ語には英文法におけるような時制の一致の原則がない。逆に言えば、ドイツ人が英語の間接話法を学ぶ際には時制の一致について一通りの訓練をする必要があるわけである。したがって CONTACTS においても、伝達動詞が過去形である直接話法を間接話法に書き換えさせる問題がくどいほど沢山ある。

上記は英語の時制の一致のシステムの一端を示したものである。例えば最上欄を見れば、reporting clause（伝達節）が過去形で、直接話法が現在形するとき、間接話法は過去形になることを示している<sup>5)</sup>。

伝達動詞が past, past perfect, future in the past, future perfect in the past の時の各場合について考えている。複雑そうに見えるが、時制の一致は（意味によるのではなく）形態としての動詞の語形に基づいてなされると考えると、次のように整理することができる。

形態としての過去形の要素が2種類あると考える。すなわち、語形変化による過去形（例えば write に対する wrote）と完了形（have + 過去分詞）である。

伝達節の欄には幾つかの種類の前過去形が掲げられているが、いずれも、直接話法を間接話法に変換するときに、動詞に形態としての過去形の要素を一つ付け加えている。ただし、過去形の要素が結合するのは二つまでで三つ以上加算されることはない。

例えば三つ目の欄で考えてみると、“Did you write...?”（simple past）という一つの過去形の要素をもつ形態に、完了形という過去形の要素が加わることによって、...if I had written...（past perfect）という二つの過去形の要素をもつ形態ができる。

さらに、四つ目の欄を見ると、直接話法が過去完了形（“Had you written...?”）で、すでに二つの過去形の要素をもっているため、そこにさらに過去形の要素が加算されることなく、間接話法も過去完了形（...if I had written...）である。

次に、英語とドイツ語の、直接話法の時称とそれに相当する間接話法の時称との関係をまとめ、

ドイツ語については例文を与えておく。

英語（伝達動詞が現在形るとき）

直接話法	間接話法
現在	現在
過去	過去
現在完了	現在完了
過去完了	過去完了
未来	未来
未来完了	未来完了

英語（伝達動詞が過去形るとき）

直接話法	間接話法
現在	過去
過去	
現在完了	過去完了
過去完了	
未来	未来の法助動詞を 過去形にする
未来完了	

ドイツ語（伝達動詞が現在形であっても過去形であっても同様）

直接話法	間接話法
現在 Er sagt(sagte): „Ich bin krank.“	現在 Er sagt(sagte), er sei krank.
過去 〃 〃 〃 : „Ich tat es.“	
現在完了 〃 〃 〃 : „Ich habe es getan.“	現在完了 〃 〃 〃 , er habe es getan.
過去完了 〃 〃 〃 : „Ich hatte es getan.“	
未来 〃 〃 〃 : „Ich werde kommen.“	未来 〃 〃 〃 , er werde kommen.
未来完了 〃 〃 〃 : „Ich werde es innerhalb einer Woche getan haben.“	未来完了 〃 〃 〃 , er werde es innerhalb einer Woche getan haben.

(cf.相良守峯『ドイツ語学概論』博友社,279-280ページ)

なお、直接話法を間接話法に変換するとき、英語は、時制の一致以外にも色々と考えなければならないことがある。例えば、伝達動詞の say を tell に、here を there に、tomorrow を the next day に変えたりするが、ドイツ語ではそのような点は問題にしない。(福田幸夫『英語活用ドイツ語入門』白水社,189ページ)

\* Adverb について

<p><b>Adjective or Adverb?</b></p> <p>Celia works (quick/quickly), but she is often (careless/carelessly).</p> <p>Penny works (slow/slowly) but (careful/carefully).</p> <p>My mother is a (good/well) driver. She always drives (safe/safely).</p>
--

Men use their environment (careless/carelessly) and (wasteful/wastefully).  
They often kill animals (cruel/cruelly).

(CONTACTS 8, p.84)

すでに前稿(『阪南論集人文・自然科学編』第31巻第3号, 6ページ)で述べたように, ドイツ語には形容詞と副詞の語形上の区別がない。したがって副詞の用法については各所に「文中における副詞の位置」「比較級(more ~ly)と最上級(most ~ly)」「場所の副詞(there, home), 時の副詞(now, tomorrow), 頻度の副詞(often, sometimes)」などについてのかなりキメの細かい説明がなされている。上記は形容詞と副詞の使い分けの練習であるが, ドイツ人にとって, そう簡単なことではないかもしれない。

## \* 進行形について

**State verbs and action verbs**

People in the Sahel zone *need* food.

People in Nigeria *want* law and order.

They *own* a five-acre farm.

The poor people *depend on*  
international aid programmes.

Life in African cities *differs from*  
life in European cities.

- They *are suffering from* diseases.

- They *are longing for* better living conditions.

- They *are working hard* to make a living

- Most of them *are starving*.

- Thousands of people from rural areas  
*are moving into* the cities every month.

- Thousands of poor people *are living*  
in the streets without a proper home.

All these verbs express states or  
facts. They only occur in the  
simple form.

All these verb forms express ongoing  
actions or events.

**The time:** No specific time,  
any time, all the time.

**The time:** Now, the moment of speaking,  
this week or this period of time we are in.

**Attitude of the speaker/writer:**

No specific attitude, interested  
only in the fact. You cannot use  
-ing forms here.

**Attitude of the speaker/writer:**

he/she is talking of an action or event  
which is unfinished, incomplete, in  
progress, going on during the period of  
time we are in. To state facts, you can  
also use the simple form here, if you  
refer to the events as neutral facts.  
Often the -ing form shows that the  
speaker does not accept the actions as  
facts, but dislikes them.

(CONTACTS 10, p.71)

ドイツ語には英語の進行形に相当する形はないので, ドイツ人が進行形を学ぶためには, be + ~ing という形態がどのような意味をもつかを説明してもらうことから始める必要がある。上記では,

動詞を「静の動詞」と「動の動詞」<sup>6)</sup>に分類することによって -ing form の用法を把握させようとしている。説明文もすべて英語で、「しばしば -ing form は話者が同意したくない行為を示す」といった様なかなり微妙な点についても説明している。上記以外にも進行形について言及した箇所は多く、「単純過去形 (Simple Past) と過去進行形 (Past Progressive)」「進行形の各時制 (現在進行形, 現在完了進行形, ……)」などについての説明や練習が各所にある。

#### \* 現在完了形と過去形

##### Present perfect or past tense?

Mein Freund *wohnt* schon seit zwei Jahren in unserer Stadt.

Vor einem Jahr *haben* wir uns auf einer Party *getroffen*.

Wir *haben* viele interessante Dinge *gemacht*.

Neulich *habe* ich ihm das Haus meiner Großeltern *gezeigt*.

Dort *habe* ich drei Jahre lang mit meinen Eltern *gewohnt*.

⋮

(CONTACTS 10, p.119)

過去の出来事を表すのに、ドイツ語には現在完了形と過去形という二つの文法形態が存在しているが、過去という時間の諸相を分類するために、この二つの形態を区別して使っているわけではない。(口語では過去を表す全ての場合に現在完了形を使うことが多い)。

英語の場合、内容的に現在となんらかの関係のある時には現在完了形を、現在と切り離された出来事のときは過去形を用いるというように両者を区別して使っている。このことについては、前稿 (『阪南論集人文・自然科学編』第31巻第3号, 4ページ) で既に述べた。

ドイツ人は、英語の現在完了形と過去形がもつ意味の違いを学ばねばならない。上記のドイツ語文を英語に訳すとすれば、それぞれどちらの時制を用いることになるだろうか。上記のそれぞれのドイツ語文に、ドイツ語の単語の一つ一つに英語を対応させてドイツ語文の語順どおりに並べたものと、自然な英語の訳 (と筆者が考えるもの) を下記に掲げる。下記のドイツ語文と英訳を見ても分かるように、現在完了形と過去形のいずれを用いるかは、ドイツ語と英語とで必ずしも一致しない。

過去のある時点から現在に至る時間の流れを、英語はドイツ語より細かく描写する。その結果、注8)、9) で指摘するように、英語は過去の出来事をより多様なコンテキストの中で考え描写することになる。

ドイツ人にとって英語の現在完了を学ぶことは、時制構造そのものをより深く認識し理解することでもある。我々の場合、日本語には文法的に時制構造といえるものが存在していない。時制概念そのものが我々にとっては雲をつかむようなものである。ドイツ人の場合、学習の初期の段階において、両言語の時制構造をかなり詳細に比較検討することになる。ドイツ人と日本人とでは、特に初学者の場合、英語の時制構造に対する認識度はそのレベルが異なると言えよう。

Mein Freund *wohnt* schon seit zwei Jahren in unserer Stadt.<sup>7)</sup>

My friend *lives* already since two years in our city.

My friend *has* (already) *lived* (for) two years in our city.

Vor einem Jahr *haben* wir uns auf einer Party *getroffen*.  
 Before one year *have* we ourselves at a party *met*.  
 One year ago we *met* at a party.

Wir *haben* viele interessante Dinge *gemacht*.  
 We *have* many interesting things *done*.  
 We *did* [*have done*] many interesting things.<sup>8)</sup>

Neulich *habe* ich ihm das Haus meiner Großeltern *gezeigt*.  
 Recently *have* I him the house of my grandparents *shown*.  
 The other day I *showed* him the house of my grandparents.

Dort *habe* ich drei Jahre lang mit meinen Eltern *gewohnt*.  
 There *have* I three years long with my parents *lived*.  
 I *lived* [*have lived*] there for three years with my parents.<sup>9)</sup>

#### ☆「第一部 3 (文法的説明その他について)」の総括

以上、ドイツの英語教科書において文法的説明がいかなっているかを見てきた。各文法項目につき、まず CONTACTS から直接引用し、次に筆者がその引用箇所について解説を付け加えるというスタイルを採った。ドイツ語を引き合いに出して説明することが多かったが、その際、ドイツ語を熟知していない人にも理解してもらえることを前提に説明したので、ドイツ語をよく知っている人にとっては冗長に感じるところがあるかも知れないが、読者を限定しないためにあえてそうした。

CONTACTS からの引用箇所の内容が、我々にとっては分かりきった内容であることもある。我々が中学・高校で習うのと同じような文法説明もあるが、それらは、すでに学校文法をマスターした人にとっては分かりきったことであろう。あえて分かりきったようなことをいちいち引用したのは、ドイツ人がその文法的説明に初めて遭遇したときの様子を追体験してもらうためである。ドイツ人が英文法を学ぶというのはどういうことか、日本人が英文法を学ぶのとどう異なるのかということを理解してもらうためである。多くの場合、同じ文法説明でも日本人とドイツ人とでは受け止め方が異なる。その説明のもつ意味が異なる。

英文法とドイツ語文法はよく似ているが多少のズレはある。英文法にだけあってドイツ語文法にない文法事項というものがあり、CONTACTS では当然そのような点が重点的に扱われている。ドイツ語と英語が構造的にズレている場合、ドイツ人であっても、それなりの説明が必要になってくる。それらの箇所を見ていると、ドイツ人にとっても英文法を学ぶのはそう簡単なことではないという印象を受けるかも知れない。だがそれらは、たまたまそれらの箇所だけ、ドイツ語と英語の文法構造がズレているのである。ドイツ人が学習するのは、そのズレをどう修正するかということである。我々日本人の場合とは根本的に異なる。

我々にとって英文法とは、まったく未知の建物を建てるための設計図のようなものである。いかにその設計図の基本的なイメージを把握して歪みのない家を完成させるかである。ドイツ人の場合はすでに基本的なイメージは認識している。だから、窓の形はどうしようとか、インテリアをどうするかといったレベルのことが最初から問題になる。さらに言えば、ドイツ人は、英

文法的设计図よりもっと完璧なドイツ語文法という设计図を既に知っているわけである。英文法的设计図を見て、この家のこの部分は、この程度のアバウトな工事ですませればいいのかなどと言いながら、かなり余裕しゃくしゃくでその设计図を吟味するであろう。

完全な文法、不完全な文法などという言い方は、近現代の言語学、文法学には馴染まない表現かも知れないが、西洋語の一般的な文法カテゴリーというものを考えた場合に、その中で、ドイツ語は英語より厳密で完全な文法形態を有していると言うことはできるであろう。ドイツ人が英語を学ぶというのは、西洋語という限られた言語の世界の中でなされることであり、その際ドイツ人は英文法より完全な文法であるドイツ語文法の視点から英語を眺めながら学習しているのだと述べることは可能であろう。

我が国の英語教授法は、これまでほとんどすべて西洋産のものの受け売りであった。英語教育の専門家たちは、西洋人が西洋語を学ぶために作られた教授法を直輸入して、それらによって英語を学ぶことが最良の方法だと信じてきたようであるが、西洋語と根本的に言語系統、文法構造の異なる日本語を母語とする我々にとって、それらの教授法が必ずしも効果的だとは言えない。そういう意味で、ドイツ人が英語を学習するのと日本人が英語を学習するのと、その状況がいかに異なるかということを、ドイツ語と英語の文法構造を比べてみることによって認識することは、日本人にとってより効果的な英語学習法を考えていくうえで重要な意味をもつであろう。

## ま と め

ドイツ人はなぜあれほど英語が上手に喋れるのか。もちろんドイツ語と英語が言語系統的に似ているということが最大の理由かも知れない。しかし、彼等の英語に対する接し方そのものにも学ぶ点が色々であろう。

ドイツの小・中学校で英語の授業を視察する機会があったが、ドイツ語を使わずに英語だけで授業が行われていた。いつからそのような英語だけの授業ができるようになるのかと聞くと、最初の授業の時からだという答えであった。初めはむしろ英語だけを用い、母国語で説明したり文法的解説をするのはかなり進んでからだということであった。これは我が国の英語教育界における訳読を中心とした伝統的な方法とは順序が逆である。

ドイツは教育も地方分権的であるから、単にいくつかの学校や教科書を見ただけで、ドイツのすべての教育現場を推し量ることはできないが、一般的に、ドイツの英語教育においてはCommunicative Methodが成功していると思われる。最近、我が国においても、Communicative Approachへの志向が強いように思われるが、実際に教育現場でうまく行われているとは言いがたい。

西欧諸国においては、いまドイツを中心にCommunicative Language Teachingが政治的な動きの一環として推進されている。それは、ヨーロッパにおける政治的経済的相互依存の増加、ヨーロッパ共同体の躍進が、各国民間のより良い意志の疎通を要請したことが直接の理由であるが、よりグローバルに考えれば、エリート選抜のための英語教育から民主主義のための英語教育への移行を目指すものでもある。多くのドイツ人は、民主主義社会において、外国語の知識は、もはや文化人やエリートだけの特権的な所有物ではなく、英語は、ヨーロッパだけでなく世界中のlingua francaとしての役を担うものと考えている。英語は、あらゆる国のあらゆる階層のあらゆるタイプの人々がコミュニケーションするための手段であり、人々が自由に知識をもち、意見を述べ、社会的政治的活動を行い、基本的な人権を実現するためには、この世界語の基礎知識をもつことが、最小限、必要であると彼らは考えている。(cf. Christopher N.Candlin(ed.), *The Communicative*

*Teaching of English: Principles and an Exercise Typology*, Longman, 1978, p.49)

ドイツの英語教科書は、Communicative Language Teaching が効率的に実践できるように作成されている。すなわち、どのようなテーマで、またどのような場面で、どのようなコミュニケーションを行うかということを、教科書を構成していく上での基準に置いて、発信面の訓練に十分な配慮がなされている。文法的説明はどちらかと言えば断片的である。

ただ、ドイツの英語教科書が、日本の英語教育現場でそのまま使えるかどうか、それは今後の検討課題である。日本のこれまでの英語教科書は、どちらかと言えば、英語の統語構造をできるだけ要領良く把握させることを主眼として構成されていると言えるが、日本語が英語とは全く言語系統が異なり、独語のように英語と類似していない点を考慮すれば、我々の場合、初期の段階で統語構造についての体系的な文法的説明をしないと、一定以上のレベルの伝達を行うのに十分な英文を組立てたり理解したりすることができにくいと思われる。

ドイツ人は英語を国際語とすることに非常に熱心である。ドイツに留学した際にゼミナールの後でよく雑談をしたが、そのときドイツ人学生の一人は英語について「こんなに簡単な言葉はない」「語彙も文法もすべてアナロジー（類推）ですぐに分かってしまう」と語っていた。

ちなみにフランス人はドイツ人ほど英語が国際語になることに積極的ではない。よく言われるように、フランス人がフランス語にプライドをもっているからであろうか。それだけではないように思われる。フランス人にとって英語はドイツ人ほど簡単にマスターできる言語ではないからである。

フランス語は、日本語などに比べると、はるかに英語に近い言語である。それでもフランス人とドイツ人とでは英語習得の難易度にかかなりの格差がある。そう考えると、英語が国際語としてますます確固たる地位をもつということは、我々日本人にとって実はあまりありがたくないことなのかも知れない。だがそれが時代の趨勢であることは認めざるを得ないであろう。

以上、ドイツにおける英語教育の現状をドイツの英語教科書を通して考察した。ドイツ語と英語と日本語は、それぞれの言語間の距離が異なる。そのぶん日本人にとっての英語教育とドイツ人にとっての英語教育は異なったものとならざるを得ない。そういう現実を踏まえた上で、今後、我が国における英語教育を考えていく必要があるだろう。

## 注

- 1) 英語においても古期英語 (Old English, 700~1100年) では、動作受動は become+過去分詞、状態受動は be+過去分詞で表されたが、中期英語 (Middle English, 1100~1500年) ではこの区分が失われて両者とも be+過去分詞を用いるようになった。その代わりに、17世紀ごろから口語で get を動作受動に用いるようになった。(cf. 佐々木庸一『新英語から入るドイツ語』郁文堂、171ページ、三好助三郎『独英対照文法』郁文堂、133ページ) He was wounded. と He got wounded. の違いは、ドイツ人にとって非常に明確であろう。それはドイツ語においては単なる語彙上の相違ではなく、統語構造の一環として厳密に区別されるものなのである。
- 2) Reported speech は、Reporting verb (伝達動詞) や Reporting clause (伝達節) と対応させた場合は、「被伝達文」のことであるが (例えば、He said, "It is my book." および He said that it was his book. において、he said が伝達節、said が伝達動詞、It is my book および it was his book. が被伝達文である)、ここでは Direct speech と対応させているので「間接話法 (Indirect narration)」のことである。
- 3) 例えば Er sieht aus, als ob er krank sei. と言えば彼はもしかしたら本当に病気であるかもしれない。Er sieht aus, als ob er krank wäre. と言えば病気でもないのにまるで病気であるかのように見えるという意味である。
- 4) ただし、話し手が伝達する内容を真実だと思っているときには直接法が用いられる。

例：Ich glaube, daß du recht hast. (私はきみが正しいと思う。)

- 5) ドイツ語の場合、伝達節の動詞が現在形から過去形に変わっても、間接話法の従属節の動詞の時制がそれに応じて変化するということはない。

He says, "I am sick." ..... He says he is sick.

Er sagt : „Ich bin krank.“ ..... Er sagt, er sei (wäre) krank.

He said, "I am sick." ..... He said he was sick.

Er sagte : „Ich bin krank.“ ..... Er sagte, er sei (wäre) krank.

- 6) ドイツ語においては、動詞概念を静と動に二分し、それを文法体系を形成するための基準にすることが幅広くおこなわれている。それは例えば動作受動と状態受動 (cf. 本稿45ページ) や 3・4 格支配の前置詞の使い分け (例：Das Bild ist an der Wand. / Ich hänge das Bild an die Wand.) に見られる。
- 7) 過去に始まって現在まで継続していることを表すとき、英語は現在完了形を用いるが、ドイツ語では現在形を用いる。
- 8) どのようなコンテキストを設定するかによって用いる時制が異なる。例えば、「(そのパーティーの会場で) いろいろと楽しいことを行った。」であれば過去形を用いるであろうし、「(そのパーティーで知り合ってから今日までの間に) いろいろと楽しいことを行った。」であれば現在完了形を用いるであろう。
- 9) その家に住んでいた三年間が一昔前のことだとすれば過去形を用いるであろうし、三年前からごく最近までその家に住んでいたのであれば現在完了形を用いるであろう。

(1997年9月29日受理)